

# TAKI no TAWAGOTO

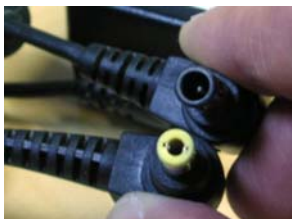
By 濱 博一

本欄担当は、書くと約束してくれましたが…締め切りは過ぎ時は流れてゆき…。今月も代筆で失礼致します。

私が使っているノートパソコンは、1Kgを下回る軽いもの。カタログでは9時間ほど持つという電池ですが、やはり電源アダプタも携帯しないと仕事用には使えません。会社と自宅の往復でも本体とアダプタ・ケーブル類を鞆に入れて持ち歩くのは、なんだか粋ではありません。

会社を片付けていると以前会社で使っていたノートパソコンが出てきました。今使っているものと同じメーカーです。そこで、アダプタを見てみると…なんとPC側の出力定格（電圧・電流）が全く同じV(^)v買えば1万円程するので、これはしめたと刺してみると刺さらない。

右上写真のようにコネクタの形だけが違うのです。それならと旧型に合うメスのコネクタと、新型に合うオスのコネクタを電気街で調達。メス側には小さなプラスチックケースも買って、その中に収めました。



半田ごてと若干のコード、メスコネクタ用の穴を開ける工具だけで、プラモデルを作るより簡単。部品代は計300円未滿。埋もれていたアダプタは、めでたくも復活され、アダプタを持ち歩く必要がなくなりました。m(\_ \_)m



このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。



2008/02  
(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)



2008/02  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 如 月



by hama

## 寄稿』「魂」が求められる時代』

「トゥルー・ノース・コンサルティング」代表 藁科勝美

昨年の「今年の漢字」は「働」でした。毎日のように「お詫び」会見があり「再発防止」という本来覚悟のいる言葉が、当事者には便利な言葉として発せられました。これらの組織にはきつと立派な「書いただけ」の理念があるのでしょうか。これをエンターテインメントと割り切り「お詫び」専門チャンネルでも作ったらと冗談とも本音ともつかない妄想が広がる一方、明日の日本を支える子供や若者がどんな気持ちでこの情報を処理しているのだろうか心配するのは私だけではないはずです。

なぜこのようなことが起きるのでしょうか。要因は色々あるのですが、それは組織が社会から求められている「使命」や「存在の意義」の変化を理解せず理解した振りをしているからです。「顧客満足」を謳いながら「作れば売れた」時代の価値観を頑固に保持しているのです。換言すれば「仏作って魂入れず」。経営システムへの過信と錯誤です。素晴らしい「仏（経営システム）」を真似たり買ったりのして満足し、それを支える一番大切な「魂」（経営者の熱き想い・組織

の価値観）を入れることを忘れたのです。これにより何がなくなっただか。組織共通の価値観（存在意義・使命）の軸がなくなったのです。逆に不細工な「仏」であっても「魂」がきちっと入っている「仏」は心に沁みてきます。そんな中小企業を私は多く見てきました。経営者が組織の価値観を自分の言葉で、社員に熱く語りかけ、社員もこの想いを共有し行動基準にまで浸透させている清々しい「入魂された真の仏」達です。

今は形を真似た、横並びの「仏（経営システム）」の時代ではありません。今は「魂」の時代なのです。「魂」には横並びはありえない、真似は出来ないし、ましてや買っただけでできないのです。それは経営者や社員の「心」そのものなのであり、組織のオリジナリティそのものだからです。これが「オンリー」構築の第一歩でもあるのです。

経営システムの優劣から「魂」の優劣が問われる時代、志を熱く語り実行する時代になったのです。



【プロフィール】  
わらしな かつみ  
経営コンサルタント。  
中小企業診断士・経営品質協議会認定セルファセッター。  
クライアントが自ら「行動」で  
きるコンサルを実施

## 濱のつばやき 『現場と魂』

「一球入魂」と聞くとスポーツ根性系のイメージが湧く。「大和魂」と聞くに世代によって連想されるのは、戦前教育あるいは忘れられつつある大切な日本人の心などかなり幅が広いのではないかと。

一方で「魂の話」と聞くと、なにやら怪しげな印象を受ける人が少なくないかもしれない。

実は今流行の「癒し」も少し前までは、かなり違和感を持たれていた言葉だった。それがストレスを意識させる時代の流れによって一般化し、やがて違和感さえも無くなっていった。「魂」という言葉も、いずれそのような時期が訪れるのではないかと感じている。

さて、その「魂の話」を意外な立場の方から伺った。あるかなり大規模な自治体の中間管理職の方とあるIT系の構想についてお話をしていたときだった。一通りこちらの話を聞いてくれた氏は、「ITベンダーのシステムは中々売れない」と一言。ついで「訳が判るか?」とこちらに真意を投げかける。首を傾けていると、いきなり「魂が入っていないから…」

現場の職員が何を考え、何をどのように工夫しながら、その業務を遂行しているのか。それらへの深い洞察力が無くてただ表面的な業務フローのシステム化や、多くの機能を盛り込んだだけでは、確かに「現場の魂」は入らない。現場の魂さえ入れば売れるシステムになる

と、氏。IT業界に手厳しいことを平然と仰る。

現在のITシステムは、現場どころか対象業務さえ知らないIT技術者が、業務を見よう見まねで設計する。大規模なシステムになると従事者も多数となるが、コンピュータはコマンド（とピリオド）のの違いさえも拒絶する融通無しの世界。僅かなミスが大きな影響を及ぼすこともあるため、ミスを防ぐには融通が利かない「仕様」を優先してしまい、勢いシステムの使い勝手は犠牲になりやすい。

現場に精通するものがIT技術を習得し、使いやすいシステムを開発する例が増えてきた。大手は対抗手段としてメーカであることを利用して機械関係を無料にするという「奥の手」で応酬している。現在の行政調達は、金額の低いものだけが勝つ仕組み。プロポーザル方式では、プレゼン慣れた「口説きのプロ」を大手は投入してその場をクリアする。

まるで精気の無い状態を「魂の抜け殻」という。「靈魂」は、現代科学の未知の広野だが、身体から魂が抜けたらトとして機能しなくなると考えるのは、ごく自然であろう。しかし今日では「魂が抜けた」仕事の仕方が増えた。法令遵守だ、マニュアル改善だと騒ぐ前に、「現場の魂」が入った仕事のやり方とは、どのようなものだったか。世間の騒動を他山の石とし、自らを省みている。

維新に「和魂洋才」と言われ百数十年。その「和魂」は何処へ行ったのだろうか。

きただより28 ノースアジア大学 上村 康之  
『合併とともに消えた国際交流・青森県旧天間林村』

青森県旧天間林村は、青森市の東隣、上北郡中部に位置し、人口約9千人を有する農業を基幹産業とする。村は2005年3月に南隣の七戸町と合併、役場本庁舎は旧天間林村役場に置かれたが村名は消滅した。この合併に伴い、天間林村と韓国慶尚南道河東郡との姉妹都市も消滅、新七戸町には受け継がれなかった。

この国際交流は、1994年11月に姉妹都市の締結が行われた。もともと何のつながりもない地域同士であったが、慶尚南道晋州市の実業家朴桂完氏がかつて強制連行され働かされた上北鉱山のある天間林村を訪問したことが縁で始まったという、韓国との交流としては、非常に珍しい形で始まった。

筆者は1995年以降、天間林村の国際交流を見てきて、また一部、当事者としても関わってきた。村の詳しい事情を知る由もないが、外の眼からみた交流の問題点を挙げてみたい。

一番の問題は、交流のコンセプト・目的が明確でないまま進められたための自然消滅ということである。具体的には、夏休みに相互に中学校を訪問する交流、ホームスティの受け入れが毎年行われた。村は1995年度～2004年度まで韓国人の国際交流員を迎え、語学や文化講座の開催、村内の学校訪問、国際交流関係のイベントなどを行った。村には語学講座をきっかけに、韓国交流のサークルも誕生し盛り上がりを見せた。

しかし、予算の縮小、交流を推進した首長の交代といった事情もあったが、交流を牽引していく仕組みができず、村から本気度が伝わってこなかった。例えば、ハングルを勉強しようという職員がほとんどいなかったこと、国際交流員という優秀な人材も使い切れなかったことがあげられる。まだまだ村は国際交流、韓国との交流といったステージに乗るには、早すぎたのではないかという気がしている。

また、国際交流に求める相手とこちらの期待のずれである。一般に国際交流に外国側は、経済交流に期待感を持っている。河東郡側は、天間林村との交流に経済交流を期待していたが思惑が外れた。そのため、河東郡は他の都市部と交流を望んでいた模様で、交流の温度差が表面化していったことも交流中止の要因となったと考えられる。

『温泉への誘い(59) — 京都の温泉 — 』

著者ご本人のご希望により、インターネット版ではご覧いただけません。



**遺言状の必要性③**

今回のケースは、世話になった息子の嫁に財産を分けたいという場合です。

直接的に血縁関係の無い場合、遺言状はとても有効な手段です。

**Case Study**

加藤さん(仮名)は、二男二女の子どもがおり、長男夫婦と同居していましたが、長男は先に亡くなってしまいました。加藤さんも妻に先立たれてしまい、晩年は病気が原因で車椅子の生活を余儀なくされました。そんな加藤さんの晩年を、未亡人の長男の嫁が献身的に介護してくれました。

何とかして、この嫁にも財産を相続させてやりたいと思うのですが、長男夫婦には子どもがいないため、このままだと長男の嫁には何も財産を残してやることができません。

**Answer**

嫁に子どもがいれば、亡父に代わって相続権を持ちますが、子どもがいない場合など、嫁が家を出ざるを得ない場合も考えられます。

嫁に財産を残す方法として、3つの方法が考えられます。

**①遺贈**

遺言状により、遺産分けをする。ただしこの場合、次の点に注意が必要です。

- A. 他の相続人の遺留分を考慮する
- B. 相続税のかかる人の場合、割高な税率になる

**②嫁と養子縁組をする**

養子縁組をすれば、嫁にも子としての相続権が発生しますし、税金面のメリットも生じます。この場合も他の相続人とのトラブルなどを避けるため、遺言状を作っておくことがよいでしょう。

**③生前贈与**

生前贈与は、贈与税の負担がネックになりますが、比較的少額の財産を与えるにはよい方法でしょう。また嫁を養子にした場合、相続時精算課税制度を利用すれば、2500万円まで非課税で贈与できる場合もあります。

ご自身の感謝の意がスムーズに伝えられるように、生前にきちんとした準備が肝心です。最適な準備ができるように税理士、司法書士の方々に相談してください。

**『 ボランティア係を担当してのお話 』**

静岡県 溝口 久

1月12,13日に、来年10月24日から11月8日まで静岡県内各地で開かれる国民文化祭のPRも兼ねた伝統文化フェスティバルを開催した。

「沼津しゃぎり」の威勢のいい鐘、太鼓の音がキラメッセ沼津の会場に渦巻き口火を切った。13時開演だというのに、入場者は途切れない。受け付けをしているのは頼んだボランティア3名の方だ。このボランティアを担当するのが私だった。昨年11月にあった技能五輪のボランティアに声掛けしたところ11人が集まった。受付、国民文化祭のPRブース、来場者への記念品渡し、アンケート受付がその仕事だ。初日6人、2日目7人に依頼した。定刻に10分前には皆さん集まった。説明に入ると、そのうち一人が(後にMr.BEENと命名)が口を挟んでくる。「黙って聞きなさい」と他の人が注意する。次はMr.Fだ。「11:40には持ち場にスタンバイしてください。」「スタンバイじゃ分からん何をすればいい?」どうもスタンバイの意味が通じなかった。「それまでにお弁当を召し上がってください。」「技能五輪の時は弁当を食べる時間を決められず、自由だった」ことごとくツッカッテくる。そこに別の人「ボランティアは担当者の指示に従えばいいのだ」「なんだとー」ボランティア同士のけんかが始まってしまった。気まずい昼食が始まった。「ボランティアはお客ではないのになどと思いつつ、業務はスタート。いざ始まると、「リーフレットにある抽選番号のことやアンケートに答えると飴がもらえる」と来場者の気を惹く言葉を掛け、熱が入っていた。Mr.Fもノッていた。順調にことは運んでいたかに見えたら、なんでここにMr.BEENが、持ち場を離れているではないか。翌日も彼は「黙ってろ」と注意受けたが、どうにも口は止まらないようだ。「ボランティアにはいろいろな人がいる」は、まさにそうだった。私が行き届かぬ担当であったことは間違いないが、ボランティアアンケートからは「暖かな対応で」といった感想があり、最終的には救われた。



※写真と本文は直接関係がありません。